

五ノ一三六、明月記にみる貞慶の行動

出典 明月記 国書刊行会

元久二年（一二〇五年）八月一二日の条

天晴、早且帰冷泉、巳時許參殿、御院參訖、院有御仏事、形部郷三位御乳母、帝御祖母追善、彼縁者進捧物、導師解脱房云々、忌帰忌日宿白河小屋、月明風冷、

承元元年（一二〇七年）三月四日の条

夜雨晴、朝陽鮮、咳病惱、今日來七日八講事、如形送笠置上人御許、

承元二年（一二〇八年）九月五日の条

天晴、（中略）明後日片野御堂供養、解脱房願文三位中将殿令清書給云云、

建曆元年（一二二一年）二月一二日の条

きのふの定に風ふく、当五七日、依扨日次不修其善云々、宜秋門院請解脱房有御仏事、依雑熱所勞不參（後略）、

建曆二年（一二二二年）二月一二日の条

自夜雨降、申後晴、午時許參八条旧院、今日解脱房說法云々、事始後參入、聴聞事訖、左大臣殿見參、有申事等（後略）

嘉祿元年（一二二五年）四月三十日の条

庚申、自夜雨降、依過三ヶ日、三位範宗、侍従光成各送賀札、三位在笠置、留守者取之云々
五月小一日、辛酉、朝天漸霽、範宗卿送昨日返事、近日在笠置、為内々畏申、白地馳上云々
入夜參相國亭、昨日被帰云々心閑謁申、

注一、既に貞慶他界後の記事であるが、笠置寺関係であるのでここに掲載する。範宗（一一七一年〜一二三三年）は鎌倉時代の歌人。信西の曾孫なので貞慶とも繋がっている。名月記の著者藤原定家とも歌人として親交があり、範宗が亡くなった天福元年六月十八日の日記には「三位二禁俄及大事之由、以金吾説信始聞、以助里相訪之処、帰来云、今晝已他界之由、子息等示返事云々、雖生死之習、猶驚而有餘、昨今無常殊以悲痛、年來所聞六十三云々」と記している。